



稲穂

豊崎小学校 校長室通信
令和6年 6月25日
第3号 文責 久保 亨



子どもを「丸ごと受け止める」会話を Part. 2



先日は、3～5年生が種差少年自然の家で宿泊学習を行いました。例年は4・5年生で出かけていましたが、3・4年、5・6年とも複式学級となったため、3年生も参加することになりました。5年生が、昨年度の経験を生かして3・4年生に教えながら、協力していかだ遊びなどの活動に取り組み、充実した2日間となりました。子どもたち同士で教え合い、助け合いながら活動することで、自ら気付き、考え、行動する力が身に付いていきます。一回り成長して帰ってきたことが、子どもたちの表情から伝わってきた宿泊学習でした。

さて、昨年度の校長室通信第11号で、親がついついしてしまう「NGな聴き方」を紹介しました。（下部に再掲しています。）そうした会話では、親がどれだけ子どもの話を聴いたつもりになっていても、子どもは「自分の伝えたいことを受け止めてもらった」という感覚が得られないため、親は自分の欲求をひとまず全部棚上げして、まっさらな状態で子どもの話に向き合うことが大切であり、子どもの話をしっかりと受け止めることが安心感・信頼感につながる、ということを書かせていただきました。

今回は、Part.2として、「では、親はどんな聴き方・話し方をすればいいの？」についてご紹介します。

日本精神療学会理事長の松本文男さんによると、そのカギは、「子どもを一人の人間として尊重する」ことにあると言います。松本さんのお話から、一部引用します。

～子どもの話は楽しいことばかりではありません。ケンカして怒りが収まらず、「次あいつに会ったらこうしてやる」などど穏やかでないことを言う時もあるでしょう。そんな時も「そんなに腹が立ったんだね」と、まずは感情を受け止め、言葉で返してあげてください。あわてて「やめなさい！」と止める必要などありません。うまく感情を吐き出して落ち着くことができれば、子どもは相手との関係を考えて、一番よい道を自分で見つけられます。

感情を受け止めてもらったあとなら、親の気持ちも伝わりやすくなります。「私は親としてこう思う」「こう感じる」と、親も素直に自分の感情を伝えてあげてください。

反抗期などで、もし子どもの言葉に傷付いたと感じたら、「今のはショックだったな」と、そのまま言葉にしましょう。人間は感情の動物です。感情のやり取りを通じて、子どもも親も成長していくのです。～

子どもの話が重要ではないように思えたり、忙しくて話を聴く余裕がなかったりすることもあると思いますが、親が伝えたいことを何度も繰り返して言うよりも、まずは子どもの話をしっかりと受け止めてから話をした方が、子どもも親の話をしっかりと受け止めます。そして、それが子どもの能力を育てることにもつながります。

まずは、私たち大人が子どもを一人の人間として尊重しようとする心構えをもち、よりよい人間関係をつくっていきましょう。

ついついやってしまう「NGな聴き方」



①親が聴きたい話だけをさせる

子どもが今日あったことを話しているのに、「授業はどうだった？」「友達とはケンカしてない？」などと親が知りたいことだけを聴く。



②適当なあいづちで聴き流す

忙しい時に、視線を合わさずに「へえ」「ふうん」といった気のないあいづちをしながら聴き流す。



③子どもの話を乗っ取る

話している途中なのに言葉遣いの間違いを正したり、「こういうことね」と話をまとめたりする。



④子どもに指示やお説教をする

話に気になるところがあると、「ダメじゃない」「こうすればよかったのに」とお説教をする。